
転移覚書

こころの未飽和と精神分析

松木邦裕著

岩崎学術出版社, A5判 232頁, 3,850円, 2024年9月刊

(北岡心理療法オフィス) 北岡征毅

松木邦裕先生が執筆に13年をかけた本書は、内外の分析家や哲学者との交流、そしてビオンとの内的な対話を通じて何度も推敲されて出版された。それでも最後に「転移論」ではなくあえて「転移覚書」とした理由を松木先生は明かし、読者に向けて、自分自身の精神分析理解を進展させる機会にするようにと促す。それを受けて私は書評に、本書から生まれた自分の満たされない何か、すなわち問いや疑問を何とか含めたい。

松木（以下、敬称略）は最初期の著作から、精神分析は転移であるという問題意識の中でそれを問うてきた。第1部で概観される転移を巡る精神分析の系譜において、今日の松木が最も依拠するのはビオンである。ビオンを通じて、認識論（いかに知るのか）と存在論（何が存在するのか）という哲学の問いが、精神分析からの問いとして立ち現れてくる。「患者と分析家の間でどのように思考が生まれるのか」と問うとき、松木の主張する「思考の実在化としての転移」が視野に確かに入ってくるのである。それは松木がビオンとの長年の対話を通じて本書でなした決定的な達成であり、転移を巡る読者への独創的な貢献だと思う。松木は本書で、概念（意味）化に至ることのない非表象^{なま}な生の感覚そのもの（ β 要素）をも含めた思考の生成を土台に、つまりグリッドの

縦軸に沿って「思考の実在化としての転移」を論じた。では「こうして生成した思考がどのように使われるのか」というグリッドの横軸を視野に入れたとき、「思考の実在化としての転移から次元が上がるのか」など、考えてみたいことが増えた。

さて、転移をめぐる認識論と存在論という一大テーマが提起される。前者を松木は、精神分析が体系化される以上は必定であると強調する。と同時に、それが理論への当てはめと化す危険性を指摘する。その上で、認識では捉えられないもの（O）に至るために、一瞬扉を開く通路とでも言うべき転移を問題にした後期ビオンの存在論的な転回と、それに対応する技法を論考する。そして前者の枠内に留まる点に、松木は現代クライニアンに限界を見る。本書は、論争の書でもある。

本書を読んで生まれた私の問いは、大きく二つある。

第一は、松木が転移を考える上で、認識からの問いと存在からの問いとを排他的に論じているように見えることである。それは間接的には、ビオンが考えたことは、認識論の時代と存在論の時代とで明確に区別できるのだろうか、という問いにつながる。第二は、認識の問いに演繹法を、存在の問いに帰納法を、それぞれ一対一で対応づけている点、つまり、推論のあり方において排他的な帰属がなされていることへの疑問である。

第一について言えば、「捉えられないもの（O）を、何とか捉えよう」と試みの中で私たちの思考（認識）は実際には絶えず拡張し変容されているのではないか。認識が存在を召喚し、存在が認識を発動する。つまり認識と存在は流動する緊張関係にあり、患者も分析家も両者の間の運動の中にいるのではないだろうか。第二について言えば、例えば転移を認識論的に捉えるにしても、私たちは面接で未知の素材に晒されながら、実際には帰納法の中にいて、直観を経験していることもあるのではないだろうか。

本書に収められた精神分析のヴィネットにある動的な何か。そして、その転移と技法を認識論——演繹法vs.存在論——帰納法の二分法によって排他的に論じる叙述。その間に懸隔が生じていて、認識と存在とののっぴきならない格闘の姿が見えにくくされている印象を持った。

本書は、飽和を望むのではなく、未飽和な問いを生み、それが対話につながる契機となることを期待して書かれたはずだ。私たちは自らの臨床を土台に

しながら、松木がこの書を通じて提起してくるものに対していかにそれを知ろうとするのか。そしてそれは何をもたらすのか。それが問われるのだと思う。